

『郷土趣味』から『民俗芸術』へ

竹内勝太郎論にむけて

真鍋昌賢

From *Kyōdo-Shumi* (Local Taste) to *Minzoku-geijutsu* (Folk Art): Research Note on Takeuchi Katsutarō

MANABE Masayoshi

はじめに

- ①不死鳥の時代
- ②混交する経験—節目としての一九二八年
- ③自らの手で—『民俗芸術』との別れ
おわりに

【論文要旨】

本稿は、詩人・竹内勝太郎の「芸術民俗学」の理論的性格を今後論じるための前提として、竹内がその構想を思い立つまでの経緯を明らかにすることを目的とした研究ノートである。具体的には、竹内が、「郷土趣味」への投稿から、「民俗芸術」への投稿を経て、そして「芸術民俗学」を構想したいと思いつくまでの経緯を明らかにしていく。本稿が提起する民俗学史記述とは、民俗学内の研究史を整理立てて構成する行為ではなく、むしろ、「民俗」「土俗」「民俗芸術」への関心のあり方が潜在させている侵犯力を、それを支えた条件とともに歴史化する行為である。

生活への難儀をかかえた竹内にとって郷土（京都）は「魔都」であった。しかし竹内は、詩作、「古代」について思索するための集団結成、「郷土趣味」への参加などを通して、郷

土と積極的に向き合うようになっていく。竹内にとって一九二八年という年は、フランス留学、「民俗芸術」への投稿という転機をかかえた年であった。竹内は、「民俗芸術」の常連投稿者になっていく。フランス留学のなかで、生活と芸術の関係、国民性という伝統、学問の連鎖を再認識し、竹内は、「土俗学」の必要性を再確認する。その一方で方法論を探求する立場から、芸術哲学として「土俗」「民俗」に知的好奇心を注ぐことを明確に自覚していく竹内は、結果的に「民俗芸術」から離れていった。「民俗芸術」は、竹内のような創作者の参入を可能にしていく可能性を秘めていた一方で、また竹内のような芸術哲学の構想を目指す者を引きつけるうえで限界をはらんでいた。

【キーワード】郷土、「郷土趣味」、「民俗芸術」、留学、創作者